
太陽とスクールライフ

小野協

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽とスクールライフ

【Nコード】

N1689V

【作者名】

小野協

【あらすじ】

いつものように快適なスクールライフを送りたい高宮洸。

でも今日の朝はすっごく目覚めが悪いし昨日のこと覚えてないし

そんな日に限って、電車の中での痴漢サラリーマンとのバトル勃発
(?)

思い出したら人の寿命半分もらってた?!

普通の生活を送りたいけど、どんどん変なトコにもっていかれる男

・子
・高
・校
の生の
朝物語
の話。

スクールライフの手前。

朝。

姉貴がけっこう前にくれたやたらと音の高い目覚まし時計になる。

(うっせー・・・)

えっと？今日は月曜か。3連休だといいいんだけどな・・・

「洗！いいかげん起きな！」

う。姉貴だ。

「ちょっと洗？！聞いてんの？！起こしてこいって言われたこっちの身にもなんな！」

「うわあ！？なんで入ってくんだよ！」

「はやく起きなって言ってるの！蹴るよ！」

「ああもうハイハイ今おきましたー!」

姉貴があんなカンジで起こしにくるのも毎朝のこと

ってワケでもないけど。

あーあー。眠い眠い。

ていうか、何でこんなに目覚めが悪い？

いつでもテンション高いのが俺、高宮洸《たかみやこう》じゃん。

昨日は何時に寝たっけなあ？

．．．．．思い出せない。きのうの夕飯食った後のことがかけらも
思い出せない。

まあいつか。今日も学校で快適なスクールライフをおくろう。うん。

アイポッドを操作しながら満員電車に乗る。

このアイポッドも姉貴にもらったお古だ。

・・・俺、姉貴にモノ貰いすぎか？

にしても人多いなー・・・

「・・・っ」

？

前に居た女の子が反応する。

震えてんのか？

・・・げ。なるほど、痴漢ね。

てかなんでこの子声あげないわけ？

声上げたら一発で誰かしら助けってくれんだろ。

・・・怖くて声も出ませんってやつ？

「！」

ヤッベエエエエエエエエ！！！！！！！！！

女の子と目エあっちゃったよ・・・

何もうこれ俺が助けないとすげえ後味悪いかんじでスクールライフ
おくることになるよねコレエ！

・・・

誰か祝ってくれ。

電車男誕生の瞬間を。

ん？ちよつと違うっけ？

よし今助けるぜエルメスちゃん！

「やめろよ。」

なんかキモいサラリーマンの腕をつかむ。

「やめろっつの。」

うおお今俺めちゃくちやかつけくね？！

俺には女の子の王子さまを見る的な表情が見える

「・・・離してもらえるかい？」

キモいサラリーマンがにっこり笑う

「は？」

「私が何をしたっていうのかな？」

えええ。ばっくれる気かこのキモリーマン!!!!

ふざけてんなよハゲコラ!

「大人をなめてるのか?」

うっ。

こういう人間には絶対なりたくねえな・・・

「君。高校生? 学校に連絡するよ?」

はあああああ?! 警察に通報するよ?!

「ちよっ・・・。アンタが今この子のケツ触ってっから・・・!」

「変ないがかりはやめて貰えるかな。証拠は?」

「なっ?! 君、いまこの人にケツ触られてたよね?!」

いやいやいや！ 周りにも見てた人絶対居るよなあ？！

なんか皆知らん顔知るけどさあ！

って俺降りる駅だしな！

「・・・すいませんっした」

ちっくしょおおおお！！！！！！

エロリーマンもエルメスちゃんも周りのやつらも皆ほんっとむか
つくなあああ！

これが現代社会の現実か。

いや俺現代っ子だけど。

イラつきすぎて校門にいるだけの校長ですらむかついてきた。

「おはよう」

「おはよう!」

だれだこんなイラついてるときに!

「あ。」

思い出した。

全部思い出した。

こいつが朝の妙な目覚めの悪さの原因。

中田太陽《なかたたいよう》だ。

「おつま・・・お前!きのうの、」

「今日の朝、かつこよかったじゃないか、まあ女の子には裏切られ

たようだけど」

「ーーーーっ?!?!」

おくれるのか、快適な・・・スクールライフ・・・

スクールライフの手前。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

今回はこんな微妙な終わり方をさせていただいてごめんなさい。

こんなですが次も読んでいただけたら嬉しいです。

小野協

黒い塊と穴（前書き）

少し残酷な描写が入ります。ご注意ください

黒い塊と穴

「っあああああ?!」

思い出した。まじ全ッ部思い出した。

「・・・その様子じゃあ忘れてたんだろうね。だから書いておけと・
・」

「なんでお前朝の知ってんだよ?!」

「・・・は? 君におきてるものは意識しなくても分かるんだよ。
」

・
・
・
・
・
・。

なんだそれ。聞いてねえぞ。なんだその『当たり前だろう？』的な顔は。

こうなったのもすべて昨日の夜のせいだ。

昨日の夜、俺の人生が変わった。

いや正しく言うと

『終わった』か。

* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *

「あっ？」

やべえ。目覚まし時計の電池朝切れたんだった。

めんどくせえけど買いにいくか・・・。

飯食った後はテレビみたいんだけどなー・・・

「ちょっと電池かってくるわ」

「あっアタシにアイス買ってきて！」

「はぁー？」

外に出るとなんとなく蒸し暑かった。

「・・・？」

なんか、人、居なくね？

ドゴオオツ！

「っ?！」

爆発音？

なんか、何かやばい気がする。

電池はいいか、明日にしよう。

・・・走ろう。

ズザアアアア！！

「なーーーーっ？！」

人だ。人が滑り込んできた。

「・・・！？」

え？何？なんでこんなびびられてんの？

てかこいつあれ。

うちのクラスに居ないっけか？

名前なんだっけな。なんか全然しゃべんないやつ……

「避ける！！！」

「っへ？」

ドゴオッ！！

………？！

「っ。」

何だ？今の

黒い塊が俺になにかを向けた。

「高宮っ！！！！！！！！」

ああ。思い出した。あいつの名前。

中田。

中田太陽だっけ……

てか。今すっげえ衝撃が……

………?!

「うわああああッ?!」

風穴。

胸に漫画とかアニメでしかみたことのないような風穴が空いていた。

何だ？

苦しい。

コンクリートに頭が叩きつけられた。

痛い。

「っが!!?」

えええ。こういうのって気絶できないもんなの？

息。

息ができない

ひゅーひゅーと喉が変な音をたてる。

びちゃびちゃと音をたてて派手に血が溢れる

遠くのほうで中田太陽と黒い塊が向かい合っている。

「・・・っ は・・・あッ」

声も出ない。

痛い。ありえないぐらいに痛い。

まぶたに生暖かいものが流れてくる。

さっきのか？ 叩きつけられた時の。

遠くで黒い塊が弾ける。

「・・・・・・・・っ」

意識が遠ざかる。

やった。

この痛みから解放される。

「高宮 アアアア！！！！！！！！！！」

あああああああ？！

何だよ！痛えんだよ！気絶させろよ！

・・・なんか変な台詞だな・・・

声でてねえけど。

「高宮！死ぬな！おいッ！！！」

「・・・・・・ッあ」

お前そんな怒鳴ったりすんだ。

本とか静かによんでそうなイメージ。

知らないけど。

「高宮！！　死ぬな！ふざけんな！」

ふざけんなはコッチの台詞だクソが！

超いてえんだよ！もう・・・死なせろ！

「死ぬな！・・・オイっ！」

グサッ。

「ツぐ・・・？！」

イッテエエエエ？！

何？！
は？！

腕に何か刺さった。

離れかけた意識がもどってくる。

それに比例して胸の痛みもひどくなる。

しかもなんか腕も痛えし！！！

「っ・・・あああ！！！！」

「そうだ！戻って来い！高宮！」

どこの医療ドラマだああ！！！！

殴る！てめえ絶対殴る！

ぼんやりと自分の胸が見える。

赤い壁。白い骨。

「ツ．．．ぐ．．．う」

気持ちが悪い。

パンツ

?!

平手打ち。

何だお前エ?!

「っげっほッ」

息。息ができる。

「げっほげほっげほッ！」

「高宮！」

コンクリートに血を吐き出す。

「えっ・・・げっほッ」

背中をさすられる。

「っはーっ・・・」

口の中に血の味が広がる。

まずっ。

そのまま地面に仰向けに寝かされる。

「高宮。きこえるか？分かるか？」

「あ・・・あ・・・」

「もう平気だ。しっかりしろ」

「っぐ・・・」

しゃべろうとしたらまた口から血が溢れた。

「もういい。いまは話すな。」

いや聞こえるかってきいたのお前だろ。

ああ。空が暗い。

「なんだコレエエ!!!!」

「何って」

「何だ今の?! なんで俺が死にかけた?! 何だ! 誰だお前!」

「誰って・・・そこまで影がうすいのか僕は」

「いや知ってる!」

「じゃあ聞くな」

「わりい・・・ って違うだろ! なんだ今の!」

「生きていたんだから良かっただろう」

「んなワケあるか！なんだあの黒いの！」

「……あやかし妖のことか？」

「あやかし？」

「妖怪……とでもいっておこうか。」

「意味分かんねえよ！」

「……じゃあ分かりやすく話そう。」

分かりやすく話されても分かる気しねえけどな……

「勇者中田はモンスターを倒するのが今日の任務でした。」

「・・・・・・・・・・」

勇者って。平気かこいつ！学校のイメージと全っ然ちがう！

「バトルするフィールドには勇者とモンスターしかいないはずでした。」

ですが、何故か今日は村人が迷い込んできてしまったのです。」

俺、村人かよ！

「そして村人はモンスターに刺されて死にかけました。」

そこで勇者は自分の寿命を半分使って村人を助けたのでした。」

「・・・・・・・・・・は？」

「分かりやすいだろう？」

「じゅ．．．寿命？」

「ああ。」

「は．．．？お前．．．寿命．．．？」

「何だ」

「寿命使っただど?!」

「そうだ。」

そうだってそんなサラツと答えんなよ！

「お．．． おま．．． 俺のために、」

「もちろん返してもらおう。」

「は？」

「まあいい。今日は僕もつかれた。明日学校で会おうだろう。そのときにな。」

「いやいやいや！そんなんおかしいだろ！」

「人間だと多分このことは忘れるだろうな。特にお前みたいなヤツは。」

あ？　どういう意味だこら。

「紙か何かに書いてから眠れ。じゃあな。」

「おい・・・中田っ　・・・ッ？！」

*　*
*　*
　　*
　　*
　　*
　　*
　　*
　　*
　　*
　　*
　　*
　　*
　　*
　　*

で。
朝。

普通に忘れて、痴漢と戦って、今。

「お前！全部話せ！ちゃんと話せ！」

「……こんなところで大声を出すのは止めてくれないか。」

「~~~~ツ!!!!」

やっぱ殴りてエ!!!!

今日は無理だな。平和な……スクールライフ。

黒い塊と穴（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回少しグロテスクな表現が入りました。

不快に思われた方にお詫び申し上げます。

次も読んでいただけることを願っています

小野協

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1689v/>

太陽とスクールライフ

2011年10月9日13時33分発行